

き さき い せき
木 崎 遺 跡

木花駅東通線道路改良事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書



2017

宮崎市教育委員会

木 崎 遺 跡

木花駅東通線道路改良事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

宮 崎 市 教 育 委 員 会

序

本書に報告する木崎遺跡は、本県における文化財行政黎明期の大規模調査として著名な宮崎学園都市遺跡群の東裾に伸びる標高4m前後の微高地上に所在します。これまでこの地域における遺跡の分布は確認できておらず、木崎遺跡が初の確認例、調査例となりました。

狭小な範囲での調査にもかかわらず複数の竪穴建物が発見され、その中から、弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられるおびただしい数の土器が出土しました。宮崎平野における弥生時代、古墳時代の研究において欠くべからざる、極めて重要な資料になるものと思われます。

調査中、近隣の小学校より見学の申し出があり、生徒たちに自分たちの住む地域の遺跡に直に触れてもらうことが出来ました。その時の、驚きと期待に満ちた子どもたちのまなざしは強く印象に残りました。次代を担う世代に、文化財保護に繋がる何らかの記憶が残せたのではないかと、今回の調査の意義に一つ大きなものが加わったように思います。

最後になりましたが、文化財保護の理念をご理解いただき調査にご協力いただいた周辺住民の皆さん、残暑の中を作業に従事された発掘作業員の皆さんおよび宮崎市建設部土木課をはじめとする関係諸機関の皆さんに厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

宮崎市教育委員会
教育長 二見俊一

例　　言

1. 本書は木花駅東通線道路改良事業にともない平成 26 年度に発掘調査を実施した木崎遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査、整理作業および本書の作成は、宮崎市建設部土木課からの依頼により宮崎市教育委員会文化財課が実施した。発掘調査は平成 26 年 9 月 25 日～11 月 20 日の期間実施した。また整理作業は平成 27 年 11 月 25 日～平成 28 年 3 月 24 日の期間実施した。
3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎市教育委員会

平成 26 年度（発掘調査）

文化財課	課長	橋口 一也
埋蔵文化財係	副主幹兼係長	島田 正浩
調査事務	主任	査 秋成 雅博
調査担当	主任技師	竹中 克繁
	嘱託	黒木 星佳
経費執行	宮崎市建設部土木課	

平成 27 年度（整理作業）

文化財課	課長	日高 貞幸
埋蔵文化財係	係長	井田 篤
調査事務	主任技師	河野 裕次
整理担当	主任技師	竹中 克繁
	嘱託	佐伯美佐子
経費執行	宮崎市建設部土木課	

4. 掲載した遺構図面の実測は竹中・黒木（星）が、遺物図面の実測は竹中・佐伯・小牟田智子・小野貞子・黒木宏多（宮崎市文化財課）および整理作業員がおこない、製図は竹中・佐伯・小牟田・黒木（星）がおこなった。また現場および遺物の写真撮影は竹中がおこなった。
5. 本書の執筆・編集は竹中がおこなった。
6. 本書で使用する方位記号は全て真北を指す。
7. 本書に掲載している出土遺物および図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査成果	
第1節 調査対象範囲と基本層序	1
第2節 遺構と遺物	

第1項 堅穴建物	8
第2項 土坑	12
第3項 その他の遺構	13

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 調査区位置図	2
第3図 遺構配置図	2
第4図 堅穴建物1実測図、出土遺物実測図①	3
第5図 堅穴建物1出土遺物実測図②	4
第6図 堅穴建物1出土遺物実測図③	5
第7図 堅穴建物1出土遺物実測図④	6
第8図 堅穴建物1出土遺物実測図⑤	7
第9図 堅穴建物1出土遺物実測図⑥	8
第10図 堅穴建物2実測図、出土遺物実測図①	9
第11図 堅穴建物2出土遺物実測図②	10
第12図 堅穴建物3・4実測図、出土遺物実測図①	11
第13図 堅穴建物3・4出土遺物実測図②	12
第14図 堅穴建物3・4出土遺物実測図③	13
第15図 堅穴建物3・4出土遺物実測図④	14
第16図 堅穴建物5実測図、出土遺物実測図	15
第17図 土坑1・2・4実測図	16

表目次

表1 出土土器観察表①	17
表2 出土土器観察表②	18
表3 堅穴建物一覧表	18

図版目次

図版1 調査区全景、堅穴建物1遺物出土状況、 堅穴建物2遺物出土状況、堅穴建物3・ 4遺物出土状況、堅穴建物5遺物出土状 況	19
図版2 堅穴建物1出土遺物、堅穴建物2出土遺物、 堅穴建物3・4出土遺物、堅穴建物5出土 遺物	20

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

平成26年6月9日、宮崎市建設部長（土木課）より木花駅東通線道路改良事業にともない宮崎市大字熊野10372-2ほかにおける埋蔵文化財の試掘調査依頼が宮崎市教育局长（文化財課）あてになされた。これを受け宮崎市文化財課では平成26年7月11・14日に当該箇所の試掘調査を実施し、遺物包含層、溝状構造、ピット等とともに多数の土器片を確認した。

その後、文化財課と土木課の間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議をおこない、事業範囲中文化財の遺存する560m²について本発掘調査を実施することとなった。平成26年9月3日付で建設部長より教育局长あて埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼があり、文化財課では同年9月25日より発掘調査に着手、11月20日に終了した。調査終了後、現地では予定通り道路改良事業が実施された。

第2節 遺跡の位置と環境

宮崎市大字熊野字木崎に所在する木崎遺跡は宮崎平野の南端、日向灘に向かって東流する清武川と加江田川に挟まれた砂堤上に位置する。現在、一帯が住宅地となっているこの砂堤は頂部標高4.5m前後で、海岸線に沿って南北に伸びる海成砂堤であり、現状の木崎遺跡はこの砂堤頂部から西側の緩斜面中に立地している。

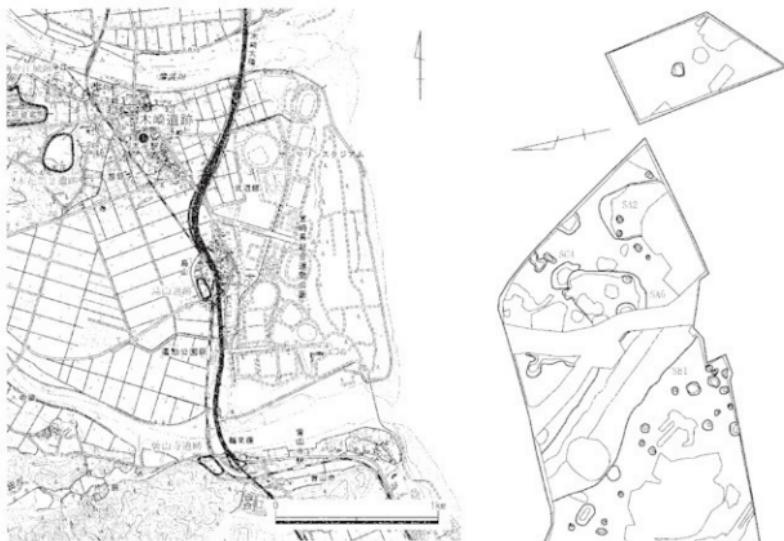
この砂堤の西には現在宮崎大学や学園木花台団地が所在する標高30m前後の台地が東西に発達しており、台地上は今江城跡や木花第2遺跡など、宮崎学園都市遺跡群と通称される遺跡密集地帯となっている。しかしこの台地の裾に接する砂堤上では、今までのところ木崎遺跡とその南方約1kmに所在する島山遺跡以外に遺跡の分布は確認されておらず、本発掘調査の事例も今回の木崎遺跡が初めてとなる。同様な地形である宮崎平野中央部の一つ瀬川と大淀川の間に発達した海成砂堤上では今までに多数の遺跡が確認されており、清武川と加江田川の間南北2kmにわたって伸びる本砂堤上においても、今回の木崎遺跡における発掘調査が端緒となって、今後多数の遺跡が確認される可能性は極めて高い。

なお紙幅の関係で割愛したが、今回調査においては近世陶磁も多数出土している。作品が重要文化財となっている江戸時代前期の刀工井上真改（国貞）は「日向国木花村木崎」の出身とされており、近世においても木崎遺跡一帯には集落が形成されていたと考えられる。

第2章 調査成果

第1節 調査対象範囲と基本層序

今回調査区における基本層序はI層：客土①（厚30cm、瓦砾多量）、II層：客土②（厚25cm、



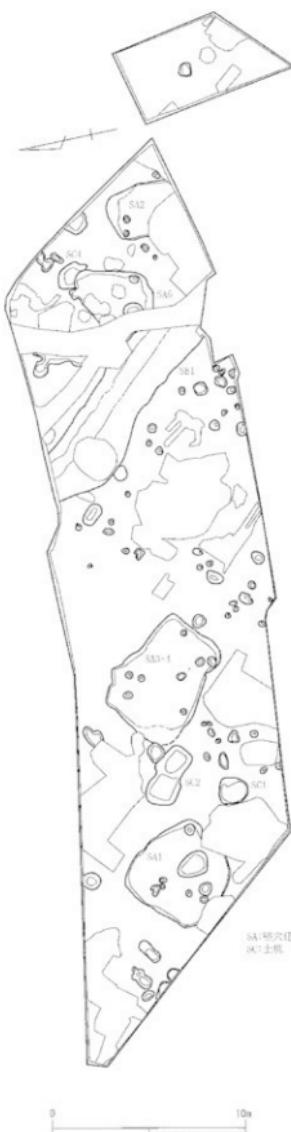
第1図 周辺遺跡分布図 (Scale=1/30,000)

※国土地理院 1/25,000 「青島」使用

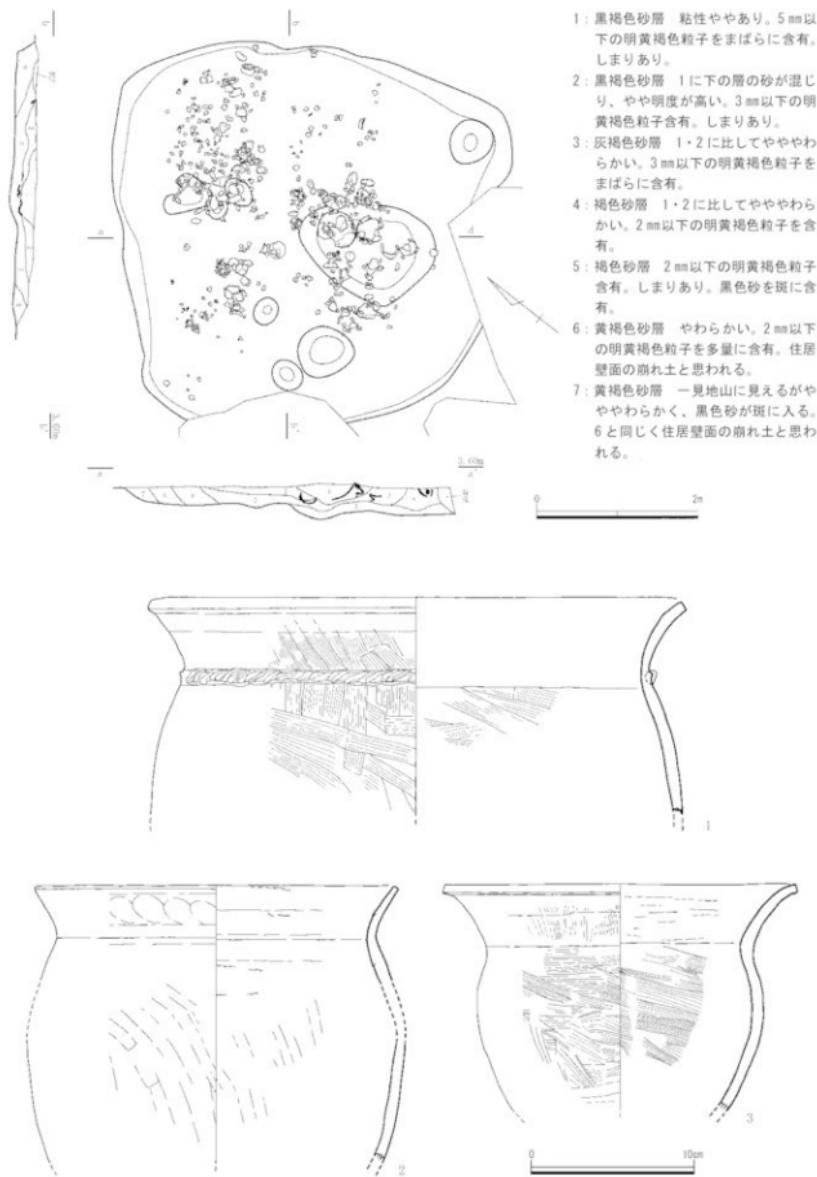


第2図 調査区位置図 (Scale=1/3,000)

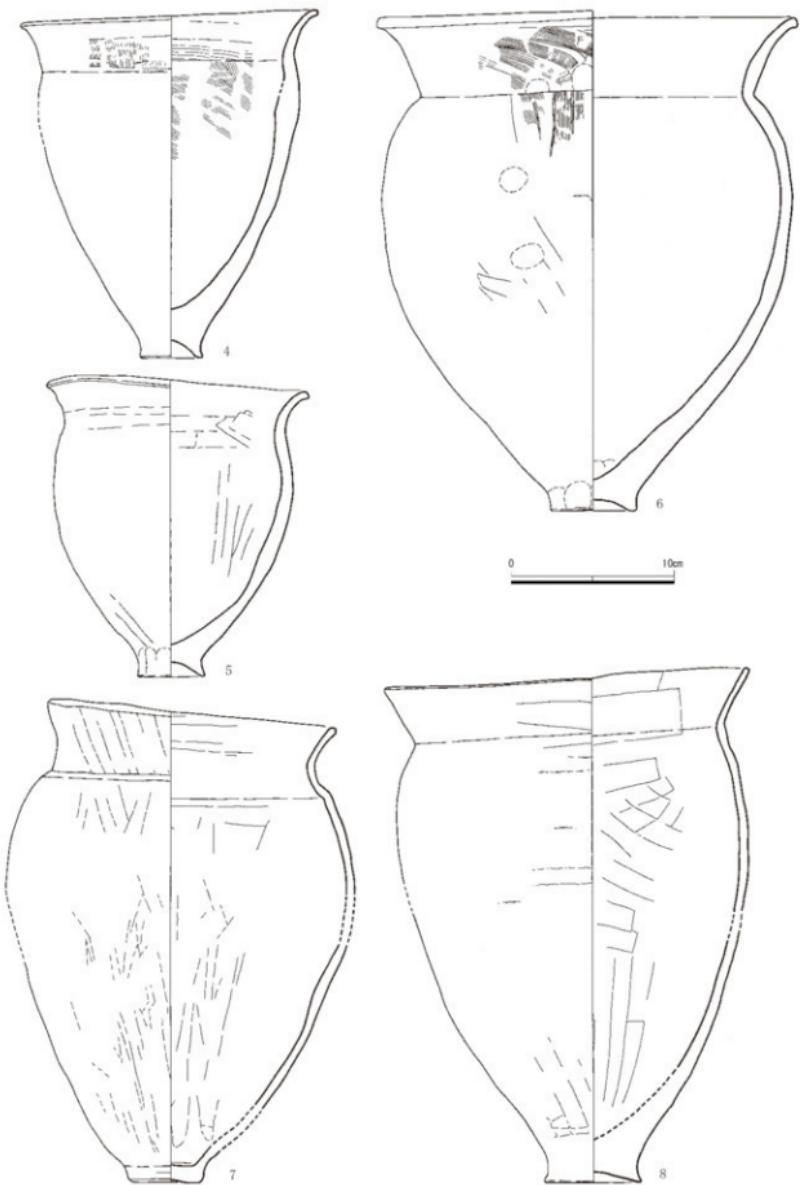
※宮崎市発行 1/2,500 宮崎市現況図使用



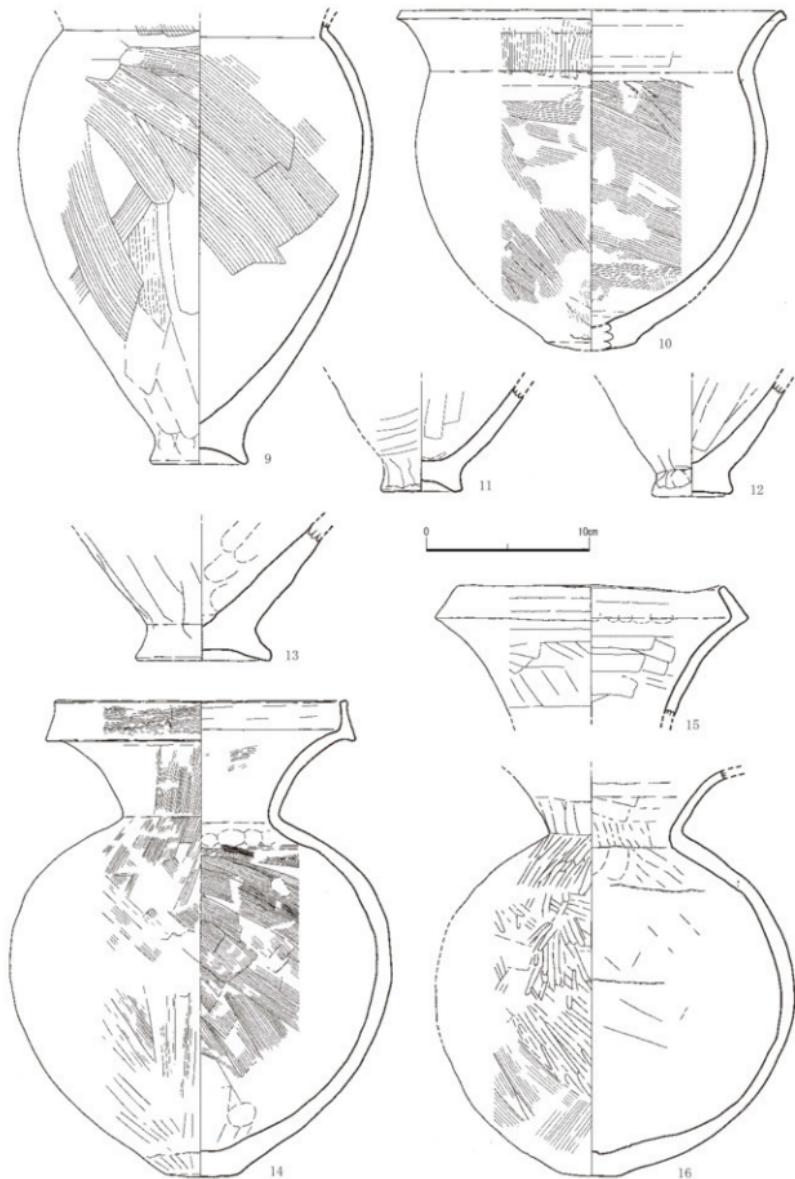
第3図 遺構配置図 (Scale=1/250)



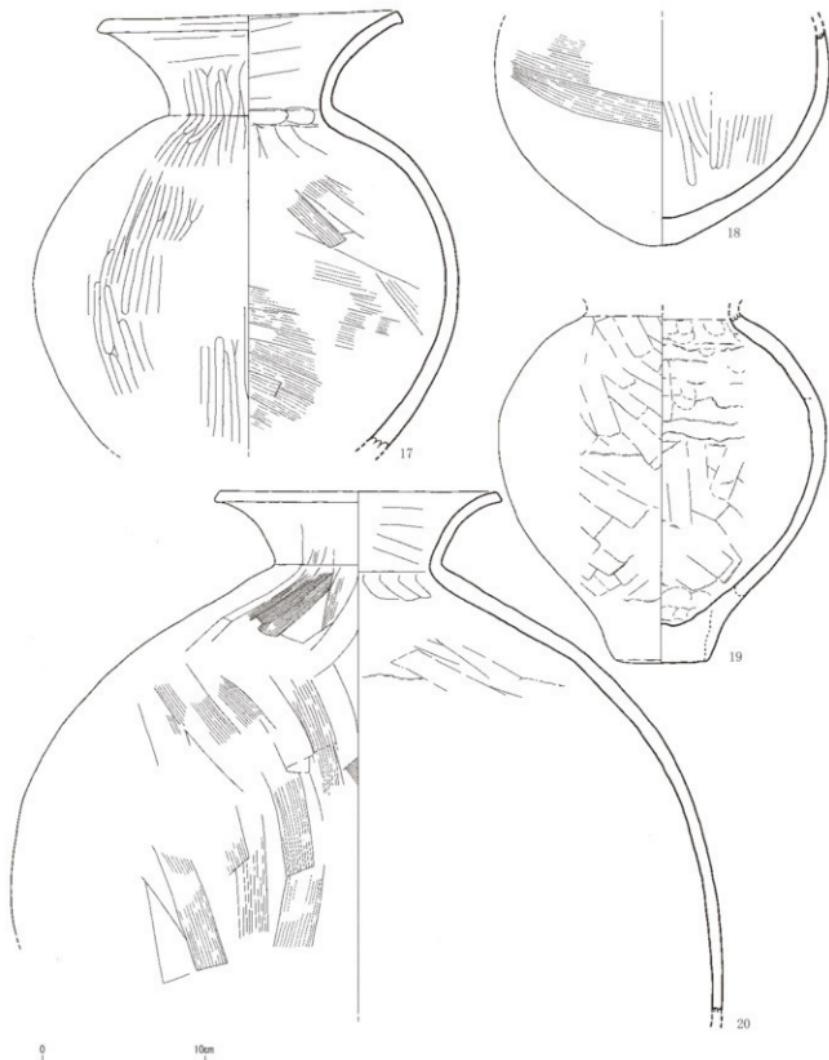
第4図 積穴建物1実測図 (Scale=1/60)、出土遺物実測図① (Scale=1/3)



第5図 積穴建物1出土遺物実測図② (Scale=1/3)

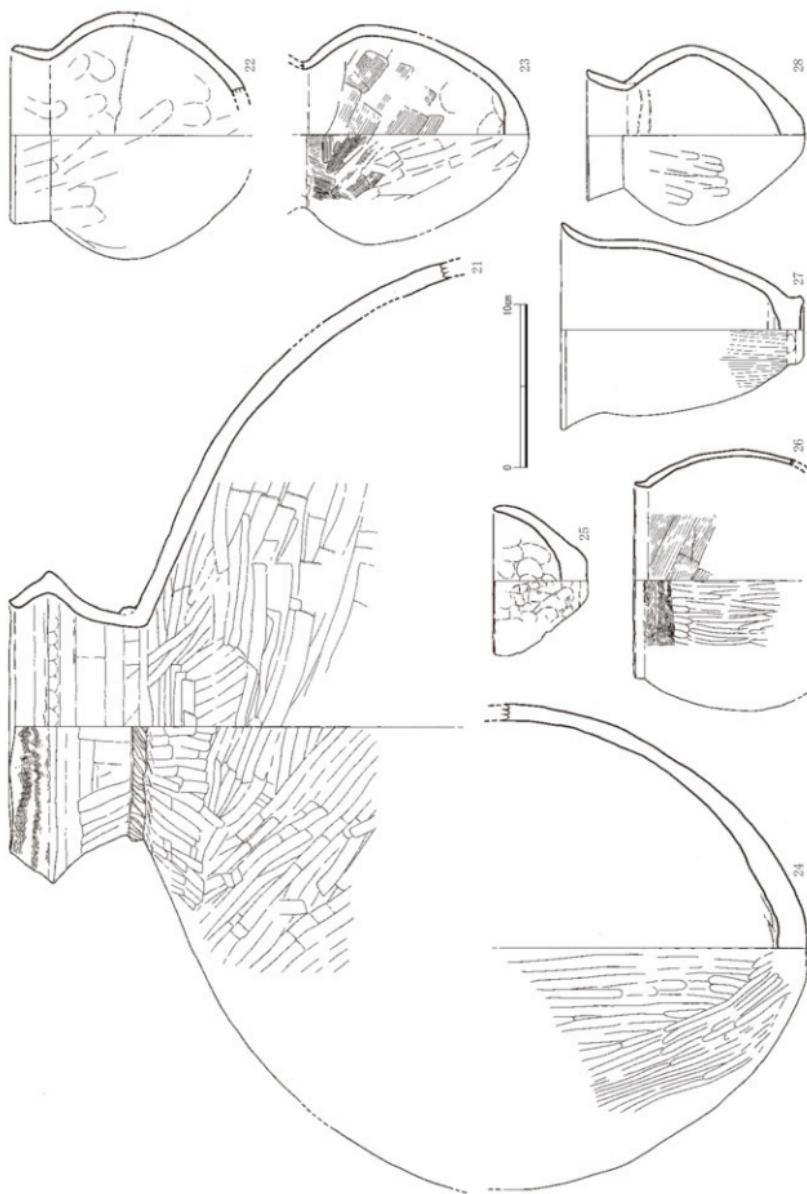


第6図 積穴建物1出土遺物実測図③ (Scale=1/3)

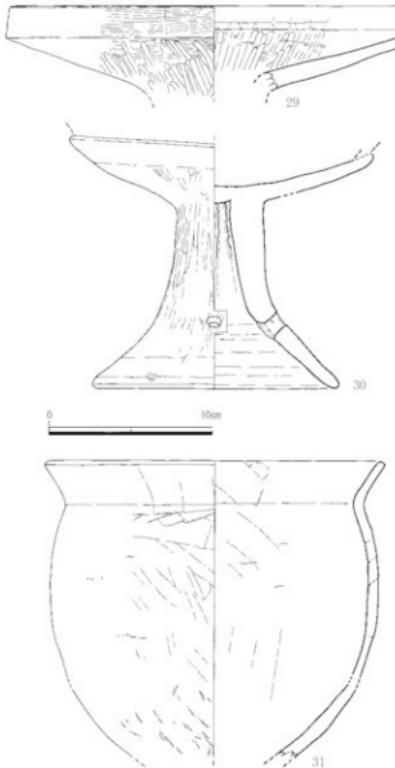


第7図 積穴建物1出土遺物実測図④ (Scale=1/3)

暗褐色砂質土。本来は、後述の遺物包含層だったと思われる土。瓦礫、ビニール片含む)、III層：黄褐色砂質土（厚20cm。地山、構造検出面。径数mmの明黄褐色軽石粒子をまばらに含有）、IV層：褐色砂質土（厚25cm。地山。上記粒子を多量含有）、V層：褐色砂質土（以下未掘のため厚不明）。



第8図 積穴建物1出土遺物実測図⑤ (Scale=1/3)



第9図 積穴建物1出土遺物実測図⑥ (Scale=1/3)

第2節 遺構と遺物

以下に述べる遺構と遺物については、表1～3の観察表・一覧表もあわせて参照されたい。

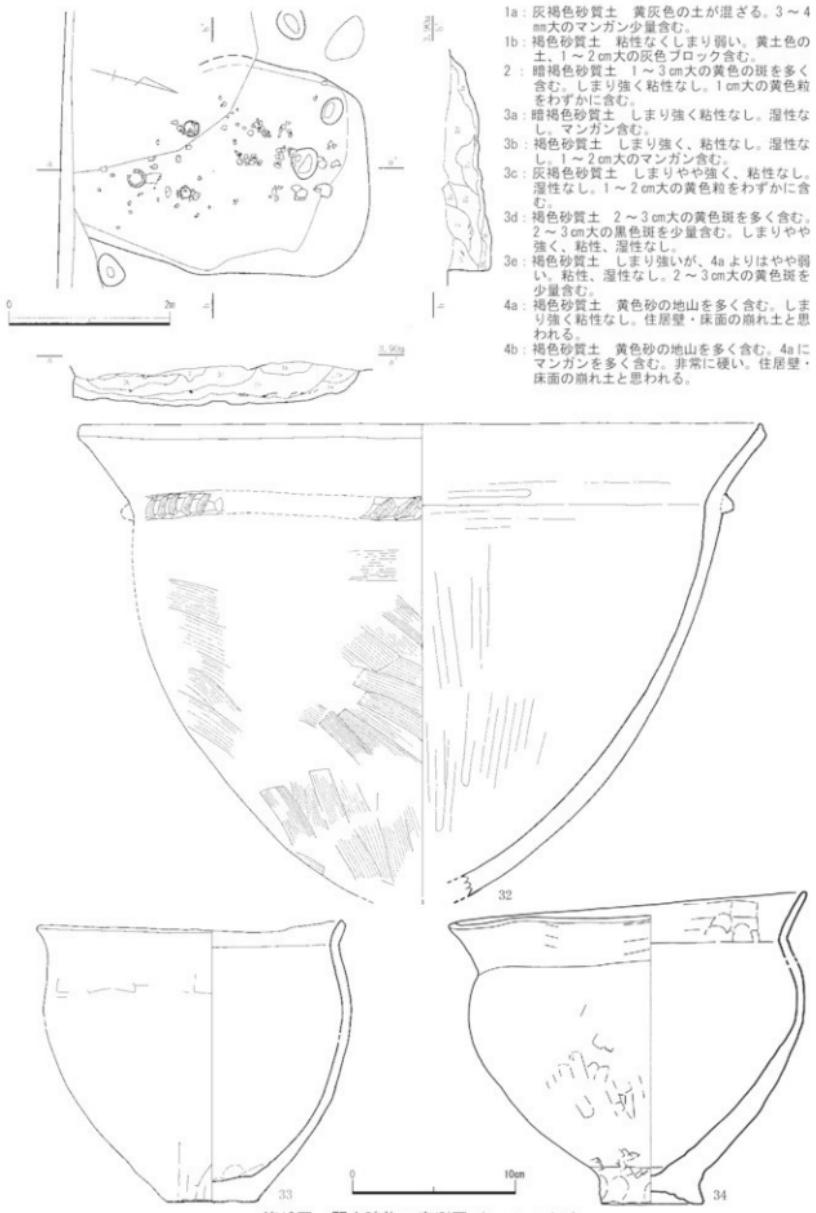
第1項 積穴建物

積穴建物1（第4～9図） 調査区西端で検出された一辺4.5m前後の積穴建物である。平面形はやや不整形ながら方形に近く、明確に並ぶ柱穴は確認されなかつたが床面には長軸1.7m、深0.2mの土坑をともなう。検出面から床面までの深さは最深で0.25mで、壁面の立ち上がりは垂直ではないが、これは地山が砂質土であることによると思われる。極めて多量の土器を出土したが、これらは据え置かれたと言える出土状況ではなく、また住居床面との間には明確な層が形成されている（第4図5層）。その層も人為的に埋められた土と積極的に評価できる様相ではないため、住居廃絶後、一定の期間を経たのちに多量の土器が一時に入れられたものと考えられる。これらは宮崎平野南部における弥生時代後期から古墳時代初頭における土器群の様相を検討した

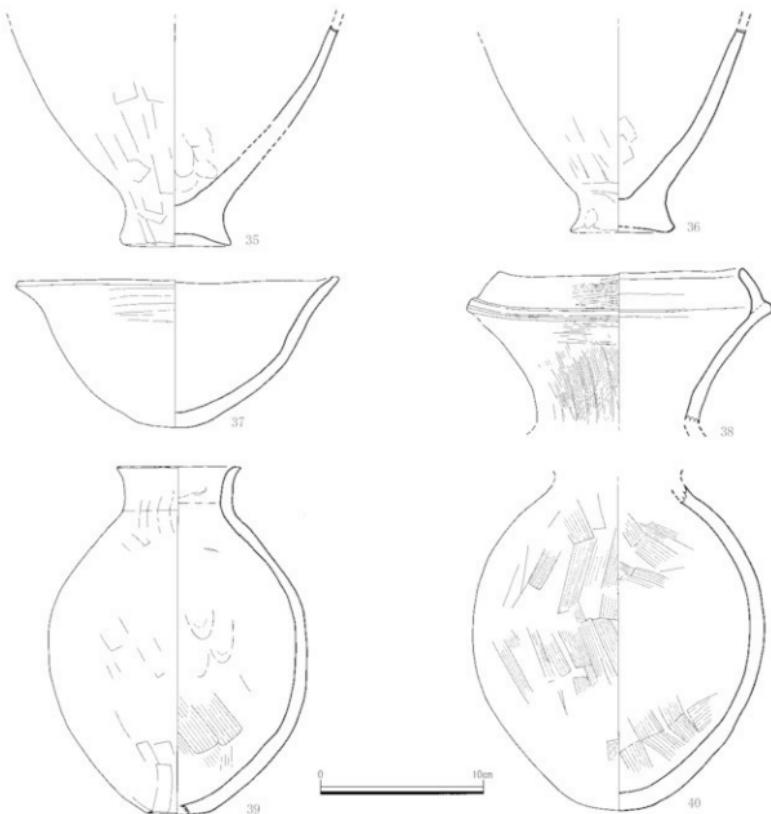
明度高く、白色に近い印象。上記粒子を多量に含有）である（積穴建物1南の調査区壁にて確認）。また調査区東側ではⅢ層上に暗褐色砂質土による遺物包含層（遺構出土のものと同時期の弥生土器片含む）が最大厚20cmで確認される。

第2図に示した今回対象範囲中、砂堤頂部に近い東側と標高が低い西側においては事前の試掘調査においてともに近年の造成土直下にⅢ層が確認されたものの明確な遺構は確認されなかつたため本調査の対象からは外した。

本調査対象範囲の現況は、東側が高く、西側に各30cmほどの高低差を持って2段ほど段下がりとなっている。調査区内における地山検出面の標高も、東端と西端で最大40cmほどの高低差がある。西側は地山直上が客土であるため削平によってこのような高低差が生じた可能性もあるが、遺構の残存度からもそれほど大きな削平を受けているとは考えられないことから、今回調査区はもともと西側に緩やかに下る緩斜面であったと思われる。



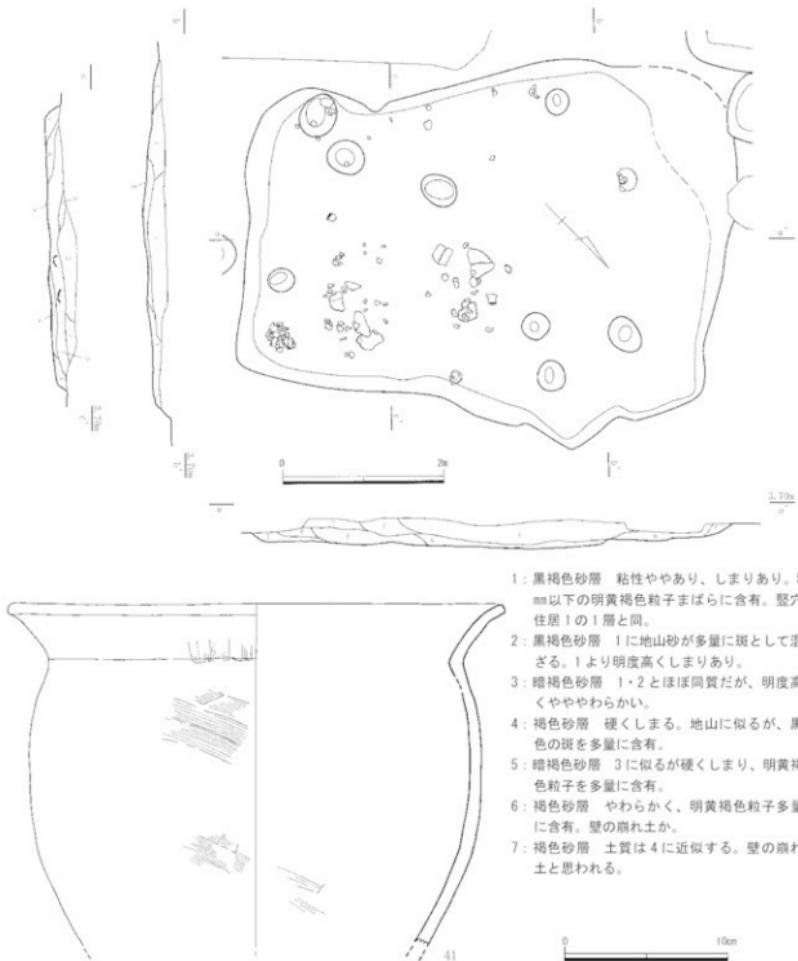
第10図 積穴建物2実測図 (Scale=1/60)、
出土遺物実測図① (Scale=1/3)



第11図 竪穴建物2出土遺物実測図② (Scale=1/3)

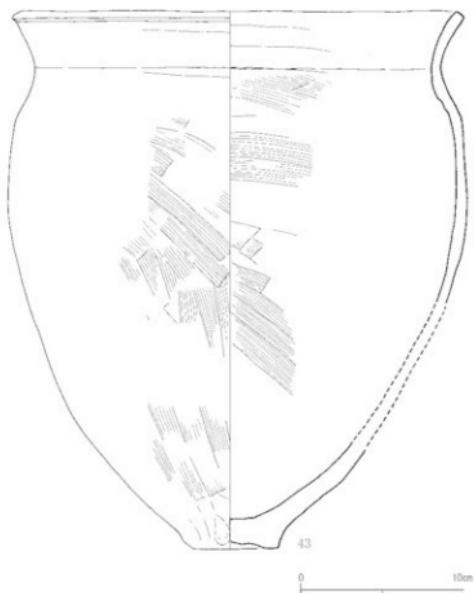
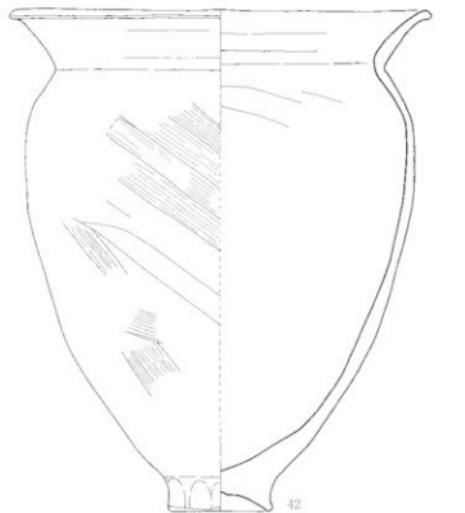
河野裕次による編年（河野 2015 年）の V・VI 期（弥生時代終末期・古墳時代初頭）に比定される。
竪穴建物 2（第 10・11 図） 調査区東端で検出された長辺 3.7 m、短辺 2.7 m の竪穴建物である。平面長方形で明確に並ぶ柱穴は検出されず、規模も小さいことから土坑の可能性もある。検出面から床面までの深さは最深で 0.5 m 前後で、竪穴建物 1 と同じく壁面の立ち上がりは垂直ではない。頭部に刻目突帯を持つ鉢と見紛う大きく開いた大型の甕（第 10 図 32）などが出土し、的確に編年に当てはめられる良好な資料は少ないが、河野編年の VI 期（古墳時代初頭）前後と考えられる。

竪穴建物 3・4（第 12～15 図） 調査区中央やや西寄りの地点で検出された竪穴建物である。前述の竪穴建物 1 の東側 4m ほどに位置し、両者は建物の主軸方向もおおむね揃う。長軸が 6m に近い平面長方形状であり、平面形も北側がやや不整形であることから 2 基の遺構が重複している



第12図 竪穴建物3・4実測図 (Scale=1/60)、出土遺物実測図① (Scale=1/3)

可能性が高いと考えて調査をおこなったが、平面検出、掘り下げ、土層堆積確認の各段階でも明確な切り合い関係は認められなかった。出土土器は河野編年V期（弥生時代終末期）に比定され、竪穴建物1の土器群と並行する。なお遺構の呼称については、遺物への注記を「SA3・4」と記したため、報告段階において遺構番号の振り替えをおこなうと後に帰属関係に混乱が生じるおそれがあると判断し、そのまま「竪穴建物3・4」とした。



第13図 竪穴建物3・4出土遺物実測図② (Scale=1/3)

竪穴建物5（第16図） 調査区の東端、前述の竪穴建物2の西側1.5mの位置で検出された長軸4.3m前後の遺構である。北西側は攪乱によって遺構のラインがやや明確ではない。竪穴建物としたが平面形は三角形に近く明確に並ぶ柱穴もないことから、土坑の可能性もある。遺物は河野編年VI期（古墳時代初頭）に比定される甕、高坏（第16図49・50）が出土したが、断面三角形状の貼付突帯を持った古相を示す甕の口縁部片（同48）も1点出土している。

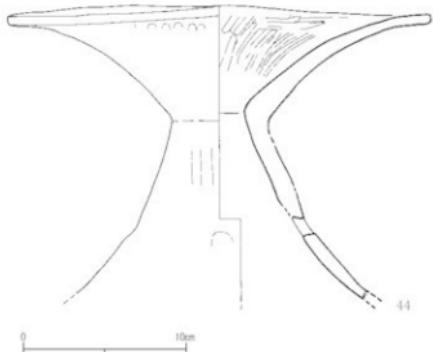
第2項 土坑

土坑1（第17図） 調査区西側やや南寄りの地点で検出された径1.5m弱、最深0.2mの土坑である。平面形はほぼ円形で、床面は中央に向かって緩やかにくぼむ。中央を石やビニール片等の入る攪乱坑によって破壊されている。出土遺物はない。

土坑2（第17図） 調査区の西側、竪穴建物1と竪穴建物3・4の間で検出された土坑である。長軸3.2mの平面長方形状で、壁面は垂直に近く立ち上がる。床面は0.2mほどの段差を持って南側が一段低くなっている。出土遺物はない。

※土坑3は欠番

土坑4（第17図） 調査区の東端で検出された土坑で竪穴建物5に切られる。径1.3m前後の平面不整形な円形で、深さは0.38m、床面は平坦に近い。床面近くより土器片が



第14図 竪穴建物3・4出土遺物実測図③ (Scale=1/3)

1点出土したが図化しえなかつた。

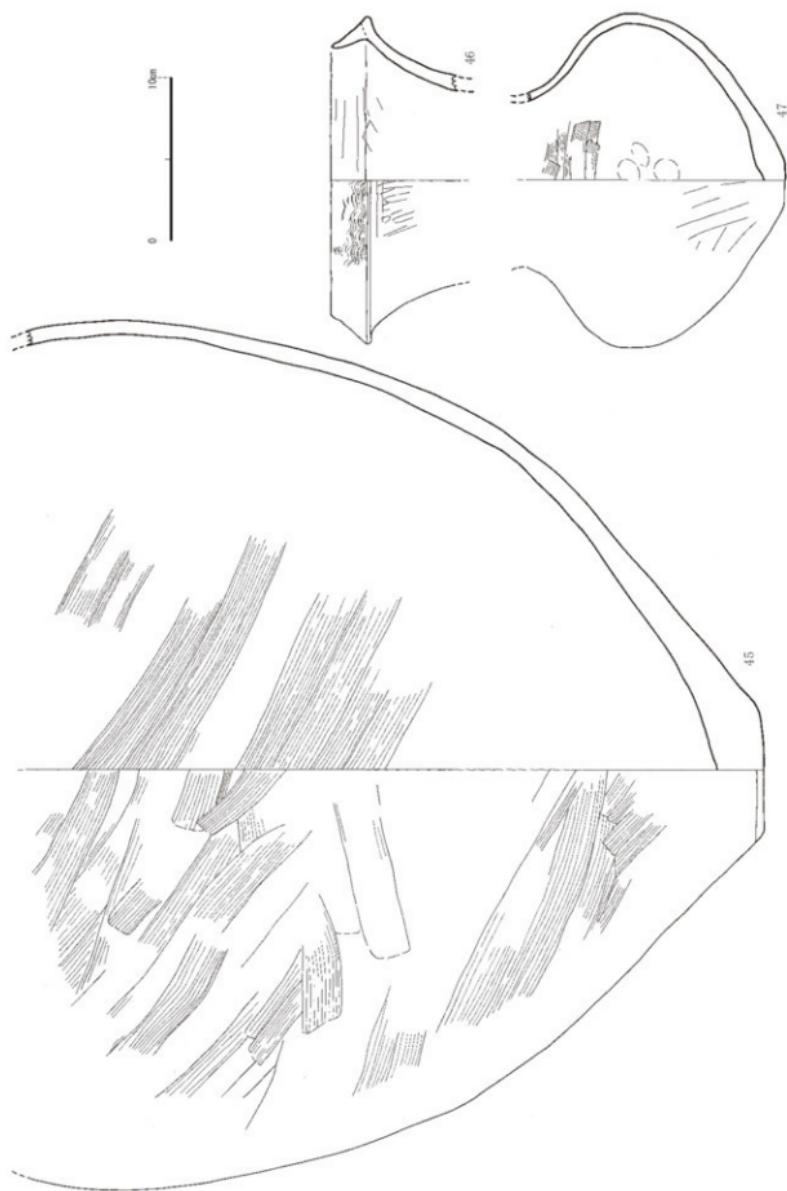
第3項 その他の遺構

溝状遺構1（第3図） 調査区の東側において北西—南東方向に走る幅2.6m前後、最深0.4mの溝状遺構である。断面形はゆるやかなすり鉢状で、近世陶磁や土錘などが出土している。

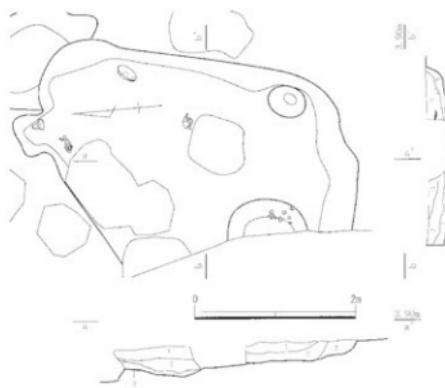
ピット（第3図） 今回調査では多数のピットが検出されている。特に調査区中央付近での偏重が顕著であるが、明確に掘立柱建物として並ぶものは検出しえなかつた。

【参考文献】

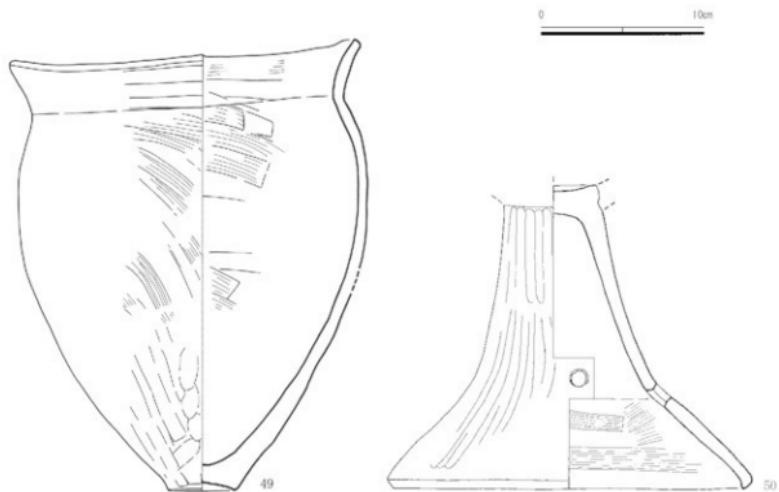
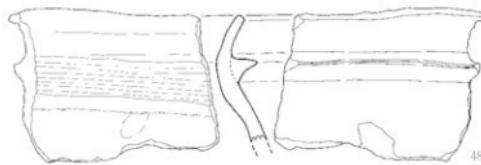
河野裕次 2015年「宮崎平野南部における
弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年
試案」『宮崎考古』第26号 宮崎考古学会



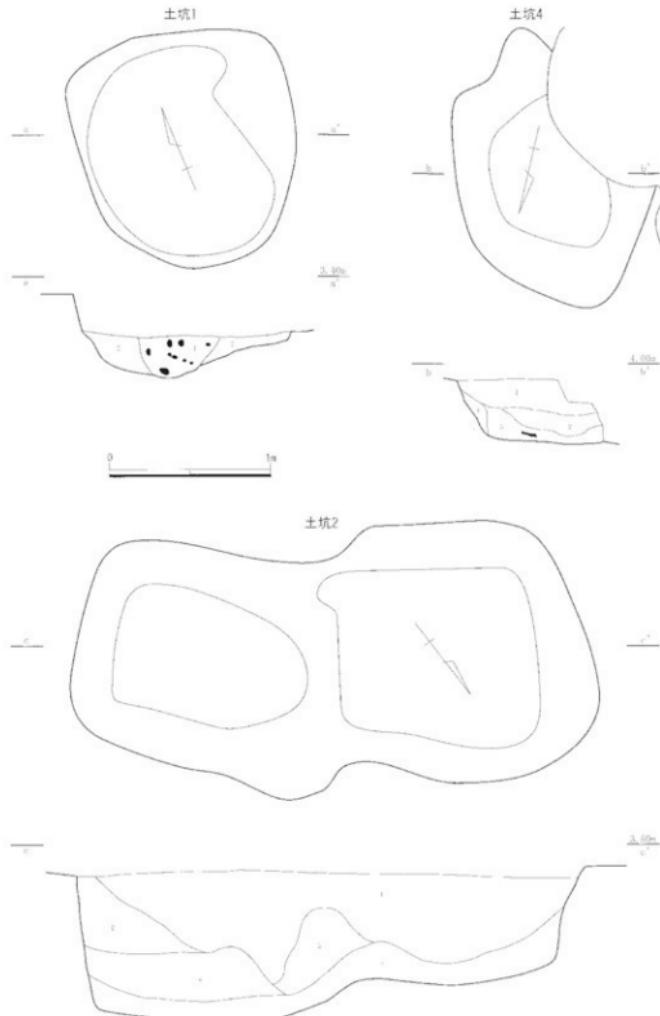
第15図 竪穴建物3・4出土遺物実測図④ (Scale=1/3)



- 1: 灰褐色砂質土。しまり強く粘性なし。1~2mm大の白色粒子を含む。2mm大の黄色粒を少量含む。
- 2: 黒褐色砂質土。しまり強く粘性、湿性なし。2~3cm大の黒色斑あり。0.5~1mm大の白色粒子を少量含む。
- 3: 黒褐色砂質土。地山の黄色砂を多く含む。しまり強く粘性なし。1~2ミリ大の白色粒子を含む。住居壁・床面の崩れ土と思われる。



第16図 竪穴建物5実測図 (Scale=1/60)、出土遺物実測図 (Scale=1/3)



- 土坑 1 1: 棕褐色砂質土 1 ~ 5 cmの石や客土のブロックが含まれる。擾乱土。
 2: 黒褐色砂質土 地山と同じ橙色粒を多量に含む。粘性、湿性なし。
- 土坑 2 1: 黑褐色砂質土 地山黄色砂の径 5 cm以下のブロックを斑に含有。粘性、湿性なし。
 2: 黑褐色砂質土 土質は 1 と同じだが、地山粒子を多量に含有。壁面の崩れ土か。
 3: 紫褐色砂質土 地山砂を径数cmの斑で含有。
 4: 黑褐色砂質土 1 に近似するが、地山砂の混ざりは少ない。
 5: 棕褐色砂質土 地山砂をベースに黒色土が混ざる。
- 土坑 4 1: 棕褐色砂質土 硬くしまる。径 1 ~ 3 mmの地山に混ざる明黄褐色粒子まばらに含有。
 2: 黑褐色砂質土 やややわらかい。上記粒子まばらに含有。
 3: 黑褐色砂質土 硬くしまる。上記粒子とともに地山砂を斑として含有。
 4: 棕褐色砂質土 やややわらかく、地山斑を多量に含有。壁面の崩れ土。

第17図 土坑 1・2・4 実測図 (Scale=1/30)

表1 出土土器觀察表(1)

発掘番号	番号	造 売	種 別	法長 cm ()	復元 口径	底径	高さ	外 面	内 面	地成	調 整				勘定 (上: mm)	測 定 号		
											外 面	内 面	A	B	C	D		
p.3 第4回	1	陶	土師 壺	(32.4)	—	—	—	にぶい・黒	にぶい・黒	良好	ハケ、ナデ	ハケのちナデ	1.3	1	少	列目実測。河野6型式	37	
	2	陶	土師 壺	(22.5)	—	—	—	浅黄褐	浅黄褐	良好	板ナデ	板ナデ	6	多	—	—	河野5型式	44
	3	陶	土師 壺	(21.6)	—	—	—	穢	穢	良好	ハケ	ハケ	4	多	—	—	—	36
p.4 第5回	4	陶	土師 壺	(18.4) (3.9)	21.2	—	—	穢	浅黄褐	良好	ナグカ (摩耗 多)	ハケ、ナデ	5	多	—	—	地成前のヒビ条。河野5 型式	27
	5	陶	土師 瓶	16.1	4.1	18.5	—	にぶい・黒	にぶい・黒	良好	板ナデ	ナデ	2	3	多	—	外面部スス付着。河野4型 式	61
	6	陶	土師 壺	(25.8) (5.0)	30.6	—	—	にぶい・黒	にぶい・黒	良好	ナデ、ハケ	ナデ	3	多	—	—	河野5型式	67
	7	陶	土師 壺	17.8	4.1	28.9	—	にぶい・黒	にぶい・黒	良好	板ナデ	板ナデ	4	多	—	—	外面部スス付着。河野4型 式	68
	8	陶	土師 壺	22.0	5.9	30.9	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	ナデ	板ナデ	3	多	—	—	河野5型式	4
	9	陶	土師 壺	—	5.8	—	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	ハケのちナデ	ハケ	6	1	少	—	—	66
	10	陶	土師 壺	23.9	5.6	(20.8)	—	穢	浅黄褐	良好	ハケ	ハケ	2.5	多	—	—	康形胴便5。制作丁寧	25
	11	陶	土師 壺	—	(4.7)	—	—	にぶい・黒	灰黒褐	良好	ハケ	ハケ	4	1	少	—	—	1
p.5 第6回	12	陶	土師 壺	—	4.7	—	—	黄褐	灰黒褐	良好	ナデ	板ナデ	3	1.5	少	—	—	2
	13	陶	土師 壺	—	8.0	—	—	穢	黑褐	良好	板ナデ・ケズ	ナデ	3	多	—	—	—	3
	14	陶	土師 壺	(17.0) (4.3)	29.1	—	—	にぶい・黒	にぶい・歩柵	良好	ハケ、板ナデ	ハケ、ナデ	3	3	多	—	白線縦横波状文	69
	15	陶	土師 壺	—	16.3	—	—	にぶい・穢	灰褐	良好	ミガキ	ミガキ	2	2	少	—	—	73
	16	穴 窓	土師 壺	—	(3.7)	—	—	にぶい・穢	灰褐	良好	同軸ハラ前	同軸ナデ、ナ	1	少	—	—	—	38
	17	陶	土師 壺	(18.1)	—	—	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	ミガキ、ハケ	ハケ	3	1	多	—	—	70
	18	陶	土師 壺	—	—	—	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	5	1	少	—	—	59
	19	陶	土師 壺	—	5.6	—	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	板ナデ	板ナデ、指ナ	2	多	—	—	—	71
	20	陶	土師 壺	—	17.0	—	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	ハケ、板ナデ	板ナデ	5	1	多	—	白線縦横波状文、頭部削 り	72
	21	陶	土師 壺	—	14.5	—	—	にぶい・穢	にぶい・歩柵	良好	板ナデ	板ナデ	2	3	少	—	—	73
	22	陶	土師 壺	(10.4)	—	—	—	にぶい・穢	にぶい・歩柵	良好	ナデ	ナデ、オサエ	2	多	—	—	—	62
	23	陶	土師 壺	—	—	—	—	にぶい・穢	灰黒褐	良好	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	3	4	少	—	—	56
	24	陶	土師 壺	—	3.6	—	—	15.6・黄	15.6・黄	良好	ナデ	ナデ	2	1	少	—	外面部黒斑	63
	25	陶	土師 壺	—	8.8	2.3	5.8	穢	灰褐	良好	ナデ	ナデ、オサエ	3	多	—	—	ヒビ多	64
	26	陶	土師 壺	(11.8)	—	—	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	ナデ	ナデ	1	少	—	—	細縞波状文	65
	27	陶	土師 壺	—	12.6	4.3	14.8	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	ハケ、ナデ	ナデ	4	少	—	—	外面部黒斑	66
	28	陶	土師 壺	(7.6)	—	—	—	にぶい・穢	穢	良好	ミガキ、ナデ	ナデ	1	少	—	—	内面部黒斑	6
	29	陶	土師 器台	(24.8)	—	—	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	ミガキ、ハケ	ミガキのちナ	3	4	少	—	白線上半剥落、透かい孔 4万個。河野5・6型式	75
	30	陶	土師 高坪	—	15.2	—	—	渕	渕	良好	ミガキ	ミガキ	3	多	—	—	—	50
	31	陶	土師 壺	(21.0)	—	—	—	にぶい・穢	穢	良好	板ナデ	板ナデ	6	1.2	少	—	地成前のヒビ多。河野4 型式	49
p.9 第9回	32	陶	土師 壺	41.4	—	—	—	にぶい・歩柵	にぶい・歩柵	良好	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	5	1	多	—	頭部削り実測	38
	33	穴 窓	土師 壺	18.5	5.5	17.2	—	にぶい・穢	にぶい・歩柵	良好	板ナデ、ナデ	ナデ	2	6	少	—	内外面部黒斑	40
	34	陶	土師 壺	21.4	6.1	19.2	—	にぶい・穢	にぶい・穢	良好	板ナデ	ナデ	3	多	—	—	河野5型式	7
	35	陶	土師 壺	—	—	—	—	5.8	5.8	良好	ハケ	ハケ	—	—	—	—	—	—

中物土 A: 寶崎小石 B: 長石・石英 C: 硫化物: 鉛丹。

表2 出土土器観察表(2)

測量番号	品番	造形	種類	法量(cm)	() 覆瓦	外 面	内 面	地成	調 整		胎土(上:cm)				測 定 番 号	
									外 面	内 面	A	B	C	D		
p.11 第11回	35	陶生・土師 壺	—	—	6.7	明滑	にぶい・壺	良好	板ナデ	板ナデ、ナデ	3 多	多	多	多	外面黑色付着	9
			—	—	6.3	7.5W6/6	7.5W5/3	良好	板ナデ	板ナデ、ナデ	3 多	多	多	多	内面黑色付着、黒斑	5
	36 37 38 39	陶生・土師 林 壺	—	—	19.4	9.1	にぶい・壺	にぶい・壺	ナデ、一部ミ 7.5W6/4	ナデミ	3 多	多	多	多	外面黑色付着	8
			—	—	14.9	—	にぶい・壺	にぶい・壺	良好	ハケ	ナデ	2 多	多	多	幅縫波状文	15
			6.6	4.0	21.2	7.5W6/3	7.5W6/2	良好	板ナデ、ナデ 部ハケ	ナデ、ナデ、ハケ	3 多	多	多	多	内面黒斑	11
			—	—	—	7.5W6/3	7.5W6/2	良好	ハケ	ハケ	4 多	1 少	多	少	内外面スヌ付着	12
p.11 第12回	41	陶生・土師 壺	29.7	—	—	7.5W6/6	7.5W6/6	良好	ハケ	ハケ、ナデ	5 多	1 多	多	多	外面スヌ付着、42と同 個体小、河野4型式	16
			6.0	30.7	—	にぶい・壺	にぶい・壺	良好	ハケ、ナデ	板ナデ、ナデ	5 多	1 多	多	多	外面スヌ付着、41と同 個体小、河野4型式	17
p.12 第13回	42	陶生・土師 壺	(25.2)	—	—	7.5W6/5	7.5W6/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
			26.7	5.3	33.0	7.5W6/5	7.5W6/3	良好	ハケ、ナデ	板ナデ、ハケ	5 多	2 多	5 少	1 少	スヌ、黒斑付着、河野5 型式	28
p.13 第14回	44 3+4	陶穴 建物	26.0	—	—	7.5W6/4	7.5W6/4	良好	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	2 多	5 少	1 少	1 少	調査内外にスヌ付着、透 かし孔4方向	13
			—	—	—	7.5W6/4	7.5W6/4	良好	ハケ	ハケ	5 多	1 少	多	少	—	24
p.14 第15回	45	陶生・土師 壺	16.4	—	—	7.5W6/6	7.5W6/6	良好	ミガキ	板ナデ	1 少	1 少	1 少	1 少	幅縫波状文	20
			—	—	—	7.5W6/6	7.5W6/3	良好	板ナデ	ハケ、ナデ	3 多	3 多	3 多	3 多	—	21
p.15 第16回	48 49 50	陶生 壺 建物5	—	—	—	にぶい・壺	にぶい・壺	良好	ナデ	板ナデ	5 多	1 少	1 少	1 少	漆村突起	22
			19.5	4.2	26.6	7.5W6/3	7.5W6/4	良好	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	5 多	5 多	5 多	5 多	外面黒斑、河野6型式	23
			—	—	—	7.5W6/4	7.5W6/3	良好	ミガキ	ナデ、ハケ	3 多	3 多	3 多	3 多	河野6型式	26

全胎土 A: 宮崎小石 B: 長石・石英 C: 鋼石・角閃石 D: 雪母

表3 穴穴建物一覧表

測量番号	団番号	遺構番号	規模			主軸方向	火候	備 考	時代
			長径(m)	短径(m)	床面積(m ²)				
p.3	第4回	窓穴建物1	4.6前後	4.5前後	20.7前後	N40°~4	なし	土器多量	弥生末～古墳初
p.9	第10回	窓穴建物2	3.7以上	2.7	10以上	N8°~9	なし	平面長方形、土坑か	古墳初期
p.11	第12回	窓穴建物3+4	5.9	4.8	28.3	N42°~4	なし	2基重複の可能性	弥生末
p.15	第16回	窓穴建物5	4.3前後	3.1前後	13.3前後	N30°~4	なし	平面不整形、土坑か	古墳初期



調査区全景



竪穴建物 1 遺物出土状況



竪穴建物 2 遺物出土状況



竪穴建物 3・4 遺物出土状況

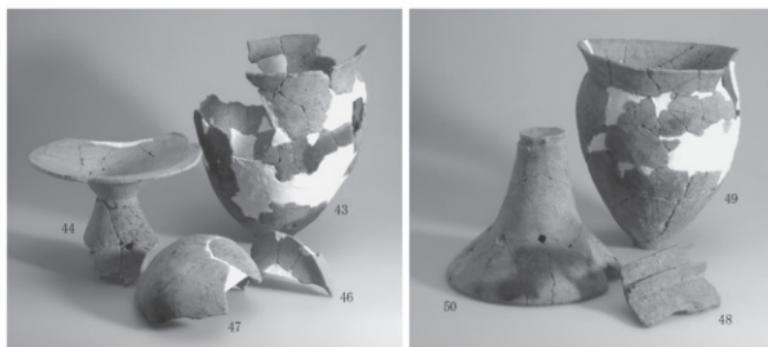


竪穴建物 5 遺物出土状況

図版 2



▼ 積穴建物 2 出土遺物



▲ 積穴建物 3・4 出土遺物

▲ 積穴建物 5 出土遺物 ▲

報告書抄録

ふりがな	きさきいせき						
書名	木崎遺跡						
副書名	木花駅東通線道路改良事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第116集						
編集者名	竹中 克繁						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-2101 宮崎市大字跡江4200-3						
発行年月日	2017年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北 緯	東 經	調査期間	調査面積
木崎遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやざきし 宮崎市 おおじまち 大字 くまの 熊野	45201	26-031	31° 49' 53"	131° 26' 18"	2014.9.25 ～ 2014.11.20	435 m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
道路改良事業	散布地	弥生 ～古墳	堅穴建物 土杭	弥生土器 土師器	堅穴建物より弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられる良好な土器群が出土		

宮崎市文化財調査報告書 第116集

木崎遺跡

木花駅東通線道路改良事業にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年3月

発行 宮崎市教育委員会